

あの人との、年月。



言わずにきたこと。

あなたは、透を殺していない。

初めて原稿を褒められた日、先生は言った。「この一行は、君にしか書けない」その言葉がうれしかった。

やがて、小説を私が代わりに書くようになった。表紙にあるのは真壁透の名前。リツも、それを知っている。

アカリは私の文章を好きだという。私が書いたと知らないまま。嬉しくて何も言えなかった。

そんなアカリが泣きながら話し始めた夜、帰る支度をやめて最後まで話を聞いた。
「話したくなったら」

渡した、一枚。



紙に、書いたこと。

20:03、書斎

代筆を辞めると告げた。「私の言葉を返してください」返事を待てずに出た。先生は生きていた。

20:07、居間

アカリにもらった白い便箋に、辞職の手紙を書いた。書き出しは「先生の名で書く仕事を、今日で辞めます。」

20:08

折った手紙を、来合わせたリツに渡した。「今から先生と話すんでしょ？これ、渡しておいてください」リツは「わかった」と言って受け取った。